

婦人と子とも



母の權威

昔から、家庭の教育には父嚴にして母慈といふ事を申しますが、父の性質は自ら嚴、母の性質自ら慈愛に富むものですから、子供を育てるに、この通り行くといふことは、まことに自然に合つた正しい道であるに違はありませぬ。子供を教育します第一期に於ける身體の注意は、どうしても深き母親の慈愛の手でなければ、とても届きません、又人間の間たる美しい優しい温かい情の育成といふもの、これも亦直接に母の温情慈愛に浴することに由りて出来るもので此時期に於ける母の慈愛といふものは特に最も必要であります、さて此間にあつて父の威嚴は、一方に於て子供に品性の鞏固、意志の獨立、

理性の明晰などいふ部分に感化を與へるのでありまして、要するに此父の威嚴と母の慈愛といふものはどうしても其一を缺くことの出来ない所の主要なる二つの勢力であります。

然し所謂父の威嚴といふのは、たゞ無闇と子供を恐がらすのでないと同じ様に、母の慈愛といふものは決して子供を甘やかすのではありません。子供を甘やかすといふのは、夫は姑息の愛と申して子供の先の爲めにも考へずに、申さば一時的の愛を施して行つてたゞ子供の機嫌を取つて行かうといふのでありますからこういふ風な愛し方は、教育上甚だ面白くないといふことは、言はずとも明であります。所謂母の慈愛といふものは、この姑息の愛と違つて母の權威といふものが沿ふて居なくてはなりません。

大抵の父つ母さんたちは、勿論姑息の愛は教育上面白くないといふ十分明な考を以て、教育して居るに違はありませぬが、然し、子供に對する母の權威といふことを十分明に自覺して愛して居られませうか。父つあんにには恐れ入つて居るが、大きくなるに従つて、兎角父つ母さんを侮るといふのは現在我國の家庭教育では極めて通例なのであります。

父つあんの在る所では謹しんで悪戯はしないが、父つ母さんの前では憚らないといふでは、教育上の不統一之より甚しきはありませぬ。既にこういふ具合であつて見ますと、大低の父つ母さんは、果して姑息の愛には陥つて居らぬといふことが出来ませうか。又母の權威を十分自覺して子供を愛して居ると

いはれませうか。

子供を愛するのは、たい犬や猫を愛するのは譯が違つて、之に十分の權威が伴はねばなりません。然るに、多くの母は、日常子供に向つて、丸で自分の權威の皆無なことを告白して居ます。惡戯をして居る子供に向つて

『坊や、そら今にお父っあんが來たら叱られますよ』といつて見たり

『早く廢さなけりや、お父っあんがお歸つたら、言ひ付けますよ』

など言ふ類の言葉は、絶えず母親の口から泄れる所であつて、夫を聞く所の子供は、夫で以て或は其惡戯は已めませう、然し、夫は母の權威で以て已めさせたのでないからして、子供は全時に、母は獨立しては、已を制裁する力がないものだといふことを認知します。ですから、此の如き類の威し文句は、結局、母が子供に對して、權威の樹立つて居ないことを告白して居るのであります、若し子供の所作が、果して禁すべき惡戯であるならば、此の如きことを言ふまでもない、斷然母の方で禁じなければならぬ夫が即ち慈愛に伴ふ母の權威であります。

又次の様な言葉も、屢母から聞く所であります、即ち母が他人に向つて、子供のことを

『どうも、我儘でござりまして、一向私の手に負へませぬ』

『もう、私ではとても駄目です、私の言ふ事なぞとても聞かないのですから』

一角、我子の自慢の積りで言ふのではありませうけれど、側で聞いて居る子供に對しては、確に、母といふものは、子供に向つて一向無勢力なものだといふことの感覺を與へることになるのであります。よく注意して觀察しますと、此様な實例が到底數へ切れない程あらうと存じます。子供が母を軽く見たり侮つたりすると申す譯は、決して母が父よりか劣つて居る者だなどいふ者からくるのではありませぬ。勿論、考のない父が、無闇と、子供の側で母を輕蔑する様なことは、夫は、子供に母を輕蔑する手本を示すので、これは論外でありますが、實際は、母たる人が、自分は子供に對して到底權力のない者で、叱つたとてても自分等の言ふ事などは聞くものでないと思ふ所から、言葉を代へれば、母たる者の子供に對する權威を確認しない所からだと考へます。

勿論、母の權威といふものは母の堅固な道德、母の確實な見識から涌出で、來て、夫が自然に子供の心に深き崇敬の情を起させる所にあるのでありますから、此點から考へて、母たる者に十分な教育が必要なのであります。

昔、羅馬の國が希臘を征服する以前に於きましては、家庭教育に母の勢力の偉大なことは、實に驚くに堪へた位でありました。従つて、當時羅馬の教育の功果は頗る見るべきでして、英雄偉人の瀕々として輩出したのは、實に之が爲に外なかつたからであります。